

3. 国粹と欧化

『学衡』のある文章で、梅光迪君が、“実は西洋人を模倣するのと古人を模倣するのとでは、模倣する対象は違うが、その奴隷であることでは同じである。まして彼らは西洋人を模倣して、滓を得るだけだが、国人で古人を模倣するものは、時に多くその神髄を得ることができるのであるから”と述べている。このおかげでわたしは模倣と影響、国粹と欧化という問題について感想を催した。梅君は模倣は全て奴隷であるが、模倣にしてその神髄を得られるのだから、やはり取るべきだと考える。わたしの意見は模倣は全て奴隷であるが、影響は悪くはない、国粹は趣味の遺伝でしかなく、模倣の使いようがない、欧化は外縁であり、できる限りその影響を受け入れてよいのだから、当然模倣で事了れりというわけではない。

もし国粹ということばが、単に文選学・桐城派の文章と綱常名教の思想を指すだけでなく、国民性全体を含むならば、わたしが仮定した遺伝という名義解釈は、なんの不都合もないと思う。われわれは各人の個性を尊重することを主張する、個性の綜合である国民性についてもむろん同じように尊重し、かつそれが文芸上で発展することができ、生命ある国民文学を形成するよう希望する。しかしわれわれの尊重と希望がどのように深く厚かろうとも、その自然な成長に任すしかなく、余計な援助は役に立たない。ちょうど一粒の小さな稲や麦の種が、その中にもとから一株の稲や麦に成長する能力を含んでいて、必要なのはただ自然の養護であるように。もし宋人のように成長を助けようと引っ張ったりすると、逆に“則ち苗枯れたり”となってしまうかねない。およそ教育を受けたことのある中国人なら、誰をも模倣しないということを唯一の条件として、その自発に任せてどんな文章を用いようが、どんな思想を書こうが、その結果はやはり“中国の”文芸作品であって、その特殊な個性と共通する国民性が並存するのである。そこには多くの外来の影響がありうるだろうけれども。こうした国粹は直にわれわれの脳神経に染み込んで、保存する必要もなく、自然と永久に存在し、またもともと消滅しえないものである。それには一つの敵しかない、それが“模倣”である。模倣者は人の奴隷となってしまう、主人の命令しかなく、さらに自分の意志がなくなると、そこで国粹は自己性ととも死んでしまう。好古家は国粹保存は古人を模倣することにあると考えるが、それが自己矛盾でなくてなんであろう。彼らの誤りは文選学・桐城派の文章、綱常名教の思想を国粹だとすることによる。なぜならばこうしたものは全て一時の現象であって、永久に自然に人々の心に付着することはできないから、無理に保存しようとするれば、模倣を唯一の手段として、古人を模倣してその神髄を得ることができた者を文学の正統と奉らないわけにはいかないのである。しかしそれが模倣である以上、決して“その神髄を得る”ということはある得ない。創造した古人には自ずからその神髄があるが、模倣者が得るのは皮毛でしかなく、つまりいうところの滓である。奴隷はどのように主人の言いつけを守ろうが、終には奴隷であって主人ではない。主人の神髄は自主にあるが、奴隷の本分は服従にある、彼に一体どうさせようというのか。彼が主人になろうとすれば、奴隷を止めることから入る以外に、ほかの道はない。

われわれは古人の模倣に反対するし、また同時に西洋人の模倣にも反対する。反対するのは一

切の模倣であって、決して中外古今の区別と先入主を持っているわけではない。杜甫あるいはタゴールの模倣、蘇東坡あるいは胡適の模倣は、いずれもわれわれの賛成するところではない。しかし彼らの影響を受けることは可能だし、また有益でもある。これがわたしの欧化問題に対する態度である。われわれが欧化を歓迎するのは一種の新しい空気が、われわれの享受に供され、新しい活力を生むことを喜ぶからであって、血管に注射して、血液の代用にするのではない。いままでには郷愿つまり偽善者の調和説があつて、中国の学問を体となし西洋の学問を用と為すことを主張した。あるいはわたしの模倣に反対し影響を歓迎する説がそれといささか似ていると疑う人がいるかもしれないが、その間には一つの違いがある。彼らには国粹が優れているという偏見があつて、そうした条件でしか大体を損なわない若干の改革しか受け入れない。わたしは遺伝の国民性を素地として、できるだけその本質的に可能な限り様々な面での影響を受け入れ、融和浸透させて、合して一体とし、連続変化して永久にして常に新しい国民性を形成する。ちょうど人間の遺伝が代を追って異分子を増入しながら、その根本の性格を失わないように。例えば国語問題は、中学を体となし西学を用と為すことを主張する者の意見では、大抵が周秦の古文を廃棄して今日の古文を使うというのが最大の譲歩である。わたしの主張は単音の漢字という本性についてできる限りを限度として、“欧化”を受け入れ、その表現力を増やすことであつて、それにやれないことを強いるのではない。こうしてみると現在の各派の国語改革運動は全て正しい軌道を走っている。あるいはもう一步進めることはできるが、ただ“三株們的紅們的牡丹花們”〔三株たちの赤たちのボタンの花たち〕というところまで行く必要はない。曲折語の語尾変化はとても便利ではあるけれども、漢文の能力の外である。われわれは一方では現代人が駢文律詩を作ることに賛成しないが、国語の字義音声の二重の対偶の可能性を疎かにせず、駢律の發達はまさしく運命の必然であり、完全に人為によるものではないと思う。したがつて国語の文学の趨勢は自由な發展に向かいつつあるけれども、この自然な傾向も大いに利用して、音楽と色彩に富んだ言語を鍊成することができる。ただ詞によつて意味を損ないさえしなければよいのだ。要するにわたしは国粹欧化の争いは無用だと思ふ。人間は本性を変えられないし、外縁を拒絶することもできない、結局は大胆に両面を是認するものでなければ不可である。もし一方に執着することを、徹底していると考えたら、それはまるで二人の学者が、一人は詩にも本能があると言い、一人は“本能を取り消せ”と言うようなもので、みんなが喧々諤々と高論を吐き、いささか気晴らしをただけのことで、いったい何の役に立つのか。

※初出：1922年2月12日『晨報副刊』